東京外国語大学総合文化研究所　総合文化研究　第 28 号（2024）
Tokyo University of Foreign Studies, *Trans-Cultural Studies*, Vol. 28 (2024)

愛知県芸術劇場　ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム「踊る文字――アヴァンギャルドが見た文字と身体」

山口庸子

コロナ禍による延期を経て、2021 年から開催しているダンス・スコーレ特別講座シンポジウムは、好評のうちに 4 回目を迎えた。今回も愛知県芸術劇場の学芸員である唐津絵理氏の参加を得て、愛知県芸術劇場との並び主催とし、芸術劇場が企画・運営する「ダンス・スコーレ」と連携して、その「特別講座」という位置づけで開催した。

最初に唐津氏から挨拶があり、紛争が激化しつつある世界の現状と能登半島地震などの災害が続くなかにあっても、芸術や学術研究が、社会に対してなお意義を持ちうるのではないか、という考えが示された。次いで、山口が、発表を兼ねた趣旨説明を行った。20 世紀初頭の社会的変動に対して、アヴァンギャルドの芸術家たちは言語の限界を感じ、しばしば身体表現に希望を見出した。一方、モダンダンスが新しい芸術として確立されてゆく過程で、一回限りの身体芸術を何らかの形で定着し、またそれによって記録・記憶しようとする試みも存在した。そこで今回の各発表では、「文字」に注目し、「文字」が持つ「モノ」としての側面、その「物質性」や「身体性」への文学者たちの着目と、逆にダンスの動きを「図像化、記号化、文字化」しようとする試みがどのように関係していたかを探った。山口は、ニーチェとリルケのテクストを取り上げて、この二つの方向性を例示的に分析した。

次に譲原晶子氏が、踊る身体の記録について、「モダニズム時代の舞踊譜」と題して発表した。まずアルボー、フィエ、サン・レオン、ステパノフ、ニジンスキー、ラバンの舞踊譜を挙げて、略語型、フロアパターン型、スティックピクチュア型、音符型、抽象記号型、という舞踊譜の歴史が示され、それが「運動」の捉え方そのものの変遷であることが説明された。そして 20 世紀のラバンに至って、舞踊譜は身体運動の空間記述となり、運動の記録・保存のための従来の舞踊譜から、運動主体による運動の生成の基盤へと変貌を遂げたことが明らかにされた。熊谷謙介氏の発表タイトルは、「象形文字とセクシュアリティの間で――マラルメとロイ・フラーに見るフランス世紀転換期のダンス」であった。まず映像を交えて、フラーの舞台に見られる、電気照明や映画など当時最新のテクノロジーやメディアの利用という現代的特性が指摘された。フラーとその表象におけるジェンダー・イメージのずれ、文字と女性身体との関係、マラルメの「象形文字」の概念や『賽の一振り』における文字の運動性などのトピックの分析の後、フラーとマラルメに認められる「踊る文字」とは、身体のパフォーマンスではなく、ヴェールやメディアを通じて「トランスーフォーマンス（変身）」する身体なのではないか、という総括が示された。大平陽一氏は「アルファベットのダンス：チェコ・アヴァンギャルドにおけるタイポグラフィの実験」で、

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

ネズヴァルの連作詩、タイゲのブックデザイン、マイェロヴァーのダンス写真を組み合わせたブックデザインの傑作、詩集『アルファベット』（1926）を中心に報告した。大平氏は、この本をチェコ・アヴァンギャルドのブックデザインの歴史およびタイゲの作品史に位置づけるとともに、それぞれの文字と踊る身体（の写真）、および書物全体との関係を詳しく分析した。最後の発表は、塚原史氏による「踊る文字、揺れる意味とジェンダー：ツァラ、ブルトンから荒川修作＋マドリン・ギンズへ」であった。塚原氏は、ラバン派のモダンダンスと関係の深いチューリヒ・ダダと踊る文字：ダンスと仮面の祝祭、ダダの代表的芸術家ツァラの「ダダ宣言 1918」と「帽子の中の言葉」:「無意味」から揺れる「意味」へ、シュルレアリスムにおけるブルトン＋スーポー『磁場』草稿と理性の統制からの解放、愛知県出身の荒川修作とその妻マドリン・ギンズのジェンダーを超える共同主体性の探求、という 4 つのトピックを立て、アヴァンギャルドから現代に至る「踊る文字」の系譜を辿った。コメンテーターの唐津氏からは、舞踊史の流れを踏まえて、7 月に公演が予定されているネザーランド・ダンス・シアターの作品を振り付けた五人の振付家、エイアール＆ベハール、フォーサイス、パイト、カリーソ、ゲッケ、が紹介された。

西岡氏の司会によるその後の討論では、書くことや書体における身体性と抽象性、踊り手と書き手のジェンダー、非西欧文字の影響、音楽と記譜法の関係、文字の表象のジェンダー／セクシュアリティ、人文字アルファベットの伝統、などが取り上げられた。フロアからは、鍛えられた身体によって書かれた文字としてのダンスは、誰にとっても読めるものなのか、また、自らの建築の中では誰もがダンサーになれる、と述べた荒川についてどう思うか、などの質問があり、動きの産出法の変遷、ダンサーと振付家の関係、ダンスの著作権などについても議論された。今回も様々な年齢、職業、居住地、分野の方々 100 名以上の参加を得て、盛会のうちにシンポジウムを終えることができたのは大変有難いことであった。

2025 年 3 月 22 日（土）には、愛知県芸術劇場と協同で、再びシンポジウム「PICTURE IN MOTION ／ MOTION IN PICTURE　アヴァンギャルドにおける映像と身体の相互交渉」を開催予定である。皆様の来場をお待ちしている。

日時：2024 年 3 月 8 日（土）　13：00 〜 17：00

場所：愛知芸術文化センター アートスペースA (12 階)

主催：東京外国語大学総合文化研究所（研究代表者：西岡あかね）
科研「身体と『モノ』から見たドイツ語圏芸術人形劇の総合的研究」（科研基盤 C: 20K00148 研究代表者：山口庸子）
愛知県芸術劇場

共催：東京外国語大学総合文化研究所
名古屋大学大学院人文学研究科

司会：西岡あかね（東京外国語大学、准教授）

発表者：山口庸子（名古屋大学、准教授）
譲原晶子（東京工業大学、教授）
熊谷謙介（神奈川大学、教授）
大平陽一（天理大学、教授）
塚原史（早稲田大学、名誉教授）

コメンテーター：唐津絵理（愛知県芸術劇場、エグゼクティブプロデューサー）

［所属・肩書は開催時］

ダンス・スコーレ特別講座シンポジウム

踊る文字

―アヴァンギャルドが見た文字と身体

日時：2024年3月9日（土）
13:00-17:00（開場12:30）
場所：愛知芸術文化センターアートスペースA（12階）
入場無料・予約不要（収容人数 120名）

アヴァンギャルドは文字と身体をどのように連動させたのか
ドイツ・フランス・チェコ・日本の前衛芸術について、
研究者とプロデューサーが詳しく解説します

司会・コメンテーター　西岡あかね（東京外国語大学　准教授）

山口庸子（名古屋大学　准教授）
「趣旨説明」

譲原晶子（千葉商科大学　教授）
「モダニズム時代の舞踊譜」

熊谷謙介（神奈川大学　教授）
「象形文字とセクシュアリティのあいだで―マラルメとロイ・フラーに見るフランス世紀転換期のダンス」

大平陽一（天理大学　教授）
「アルファベットのダンス：チェコ・アヴァンギャルドにおけるタイポグラフィの実験」

塚原史（早稲田大学　名誉教授）
「踊る文字、揺れる意味とジェンダー：ツァラ、ブルトンから荒川修作+マドリン・ギンズへ」

コメンテーター　唐津絵理（愛知県芸術劇場エグゼクティブプロデューサー）

共催　名古屋大学大学院人文学研究科

主催　愛知県芸術劇場、東京外国語大学総合文化研究所、科研「身体と『モノ』から見たドイツ語圏芸術人形劇の総合的研究」（科研基盤 C: 20K00148 代表：山口庸子）

愛知県芸術劇場ラーニング・プログラム

お問合せ・連絡先

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
西岡あかね
a-nishioka@tufs.ac.jp

名古屋大学大学院人文学研究科 ドイツ語圏文化学
山口庸子
k46439a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

愛知県芸術劇場
TEL: 052-211-7333(10:00-18:00)　FAX: 052-971-5541
E-mail: contact@aaf.or.jp